50

十九世紀中期の日本と西欧の義歯の比較

新藤恵久

「日本は職人を崇拝する国だ」戦後の米国ジャーナリストの言葉がある。

世界に誇るわが国の仏像彫刻、建築物など数々の芸術品に見られる繊細で優雅な、そして独創的な伝統技術は、縄文の昔より「木の文化」を背景に職人の手によって伝えられてきたのである。日本固有の木床義歯もこうした職人の手から創造された。

嘉永六年（一八五三）下田に来航したアメリカ東インド艦隊司令官ペリーの恫喝に屈した徳川幕府は、翌安政元年再来したペリーと日米和親条約を結んだ。同五年六月、日米修好条約締結により横浜が開港すると、日本での一攫千金を夢見る外人がやってきた。このなかには口中治療を標榜するものもあった。

元治元年（一八六四）横浜で発刊されたヒコ「海外新聞」の慶応二年、十八号に次のような広告がある。

「入歯を成んとなさる御方ハ御尋被下所持の細工歯御覧の上にて御用も仰付被下度候之ハ尋常の骨或ハ象牙蠟石にて造りしに非すせとものに類せし金にて造りし故持甚宜敷つやなど天然の歯に異らず

三十一番　レスノー　謹啓

この広告からレスノーがわが国の木床義歯について一応の知識があったと推定できる。そこで木床義歯とレスノー持参の義歯（当時の欧米の義歯）と比較してみたい。

一、木床義歯（前者とする）は、すべて個人に合わせて作られたものであるのに対して欧米のそれ（後者とする）は、既製品や患者の顎堤の概形に合せたものであった。

二、義歯床の構造

前者は、ホンツゲを用いた木製である。顎堤を密蠟で印象した蠟模型をもとに彫刻したもので、顎堤によく吸着した。

後者は、前歯と一体の陶製である。顎堤への適合はほとんど不可能で、そのため上下義歯床はコイルスプリン

グで口中に維持されていた。後者と構造の似た義歯を入れていたアメリカ初代大統領が、入歯が飛び出すので人前ではくしゃみをしなかったという話が伝えられている。

三、咀嚼機能

前者の臼歯部の金属製の鋲が著しく摩耗しているのを多く見かける。この事は十分咀嚼出来た事を物語っている。

後者は上下を結ぶスプリンにより上下の義歯が維持されているにすぎず、また顎堤への適合は期待できず、従って十分な咀嚼は期待できなかったと思われる。

四、審美性

前者の前歯は蠟石、象牙、天然歯などを鑢で彫った。なかでも高級な蠟石を使ったものが最良とされたが、象牙など変色の問題もあり、仕上がりには優劣があった。

一方、後者は陶製であるため審美的には優れている。

前者の前歯は、歯型の形成に加えて、義歯床への結合のため、結合用の糸の穴あけや維持用のアリの形成も要求された。

明治初期に陶歯が輸入されるようになると、この洋式陶歯を使用した木床義歯が出現した。当時の西欧崇拝の風潮のなかで、この義歯を入れた喜びの様子が明治十三年五月二十五日の「朝野新聞」に

「御入歯（鑲配牙歯亦西法也）」

と題した漢詩からもうかがえる。詩は西法の歯をつけた入歯の美しさは、高官の妻に譲らぬものだと述べている。

なお、広告のなかで「せともに類する金にて」とあるのは、陶製の床に金箔を焼き付けたものである。

（日本歯科医史学会）